市報 ぎょうだ
No. 853
平成29年7月1日 発行

行田 歴史系譜 280

歴史を語るこの〝いっぴん〟
～博物館の収蔵庫から～ 16

足袋屋に宛てた証文～下請けと販路拡大～

個人蔵・郷土博物館保管

近世後期になると行田の足袋屋はその数を増やしていきました。天保年間の行田町絵図によれば、職業が判明する家数264軒のうち、足袋屋が27軒を占め、町の主要産業になっていたことが分かります。これら27軒のうち、営業に関する史料がまとまって残されているのが、橋本家と秋山家です。

橋本家は行田町最大の商家で、木綿問屋や質屋なども営んでいました。屋号は荒物屋で当主は代々喜助を襲名しました。秋山家は享保17年（1732）創業と伝えられる老舗で、屋号は高砂屋、当主は代々金右衛門を襲名しました。これらの家に伝わった資料から、江戸時代後期の足袋屋の様子が浮かび上がってきます。

写真の古文書は、文化8年（1811）9月に行田新町の平八から高砂屋と荒物屋に宛てた借金返済の証文です。これには、借りた3両1分の返済として、毎月の足袋製造の手間賃から500文ずつを返済することが記されています。また、天保12年（1841）に八幡町の高木長門らから高砂屋に宛てた証文には、八幡町の勘次郎が足袋製造を始めるに当たり、高砂屋から借り受けた足袋の原料の弁済を高木らが保障することが記されています。

文政13年（1830）に陸奥国須賀川（福島県須賀川市）のかど屋庄兵衛から高砂屋に宛てた証文には、高砂屋から仕入れた足袋の代金65両の支払いが滞ったため、とりあえず高砂屋に15両を返済し、残りの50両は10年賦で返済することと、今後も高砂屋から足袋を納入してもらい、販売を続けることが記されています。

足袋手間代引当借用証文

これらの証文から、19世紀前半には、原料を仕入れて製造発注と販売を行う足袋屋と、製造の下請けという関係が成立しており、行田足袋の商圏も東北まで拡大していたことが分かります。今後も研究が進めば、行田足袋の歴史がより明らかにされていくことでしょう。

（郷土博物館　鈴木紀三雄）

特定非営利活動法人 忠次郎蔵

つながる ひろがる みんなのチカラ
～市民公益活動団体紹介～⑦

日本遺産の構成資産の一つでもある国の登録有形文化財「旧小川忠次郎商店店舗及び主屋（忠次郎蔵）」を活用、維持しながら、地域住民のコミュニケーションを促すことで活気あるまちづくりを目指しているのが特定非営利活動法人忠次郎蔵です。

同法人は平成20年10月に発足し、現在会員は35人。店蔵を手打ちそば店として再生し地域に根差した活動をしています。忠次郎蔵には年間約6,400人が訪れ、昔の生活の面影を残す建物の中で、長野県戸隠産のそば粉を使用したこだわりのそばを楽しんでいます。また、そば打ち教室も開催され、日曜日には教室の卒業生がボランティアとして店の運営をしているそうです。

「お客さんのおいしいという声が何より活力になります。今の会員は60歳代が中心となっていますが、さらに若い世代にも加わってもらい活動を継続していきたいですね」と笑顔で語るメンバーの皆さん。日本遺産の認定で足袋蔵が注目を浴びている今、その活動に期待が高まります。

【代表理事】田村 隆次　【電話番号】556―9988

そば打ち教室の様子

今月の表紙　6月7日、水城公園あおいの池で南小学校3年生によるホテイアオイの投げ込みが行われました。参加した子供たちは「1、2、3」の掛け声に合わせ、元気良くホテイアオイを投げ込みました。約5,000株のホテイアオイは9月中旬ごろ池一面に薄紫色の花を咲かせる見込みで、来園者の目を楽しませてくれるでしょう。

■市報ぎょうだに掲載されているあなたの写真を差し上げます。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）まで。
■市民の皆さんの市政に対するご意見をお待ちしています。
■市報をデイジー版に録音したものを希望者宅にお届けします。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）までご連絡ください。

VEGETABLE OIL INK
環境にやさしい植物油インキ
市報ぎょうだは再生紙を使用しています

■編集・発行／行田市総合政策部広報広聴課
〒361―8601 行田市本丸2番5号
TEL 556―1111 FAX 550―2116